論壇時評　問われる教育の意味　東京新聞-1983.07.27

京　新　聞　（夕刊）　1983. 7. 27　(第3種郵

大

ンホア」と発音する自分の名前をNHKが「サイ・ショウカ」と日本流の漢音で発音して報道するのは言語上の差別だというのである。

訴訟をおこした問題は、すでに教科書にも混乱をよびおこしているらしく、魯迅については「ろじん」と「リューシュン」、毛沢東については「もうたくとう」と「マオツ

こなわれているとしても、「リュイシュン」と「ターリェン」が旅順と大連を意味するらしいことに気づくためには、大人でもちょっと考えこむ時間が必要なのである。

ういう問題は、長期的な展望に立って、識者の意見なども十分にきいたうえで、社会的混乱をおこさないよう徐々に改善すべきであろう。

（倫敦巴里）

論壇時評 〈上〉

問われる教育の意味

▶大人の問題としての戸塚ヨットスクール

比例代表制是非含めて分析

高畠通敏「『圧勝』逸した中曽根自民党」など◀

中嶋嶺雄

今年は梅雨空がなかなか抜けなかったが、夏休みはもう始まった。東京の新宿駅は山登りに出かける乗客で賑わっている。

私のように、山国に育って北アルプスに登りつづけてきた〝地の者〟にとっては、東京や関西からの遠来の登山客がまるで〝征服者〟のように映ったものである。その山登りという〝現代文明〟そのものがいまや大きく変貌をよぎなくされているのではないか。

この問題について、『朝日ジャーナル』（七月十五日号）が「『山のぼりの魔力と魅力』考」と題する特集を組んでいる。山を考えつづけてきた串田孫一の「何故　山へ登らないのか」という巻頭エッセイが重く私の心に沈澱した。「この冬槍ケ岳冬期小屋を荒らしたのは誰だ！」という編集部ルポ、三宅修・今井通子・芦沢一洋という登山家、アウト・ドア・ライターの座談会も、大谷一良の懐かしい山岳版画とともに、絶好のエンタテイメントであった。

右の座談会には、「大人より若い人のほうがよほどしっかりしている」というタイトルがつけられているけれど、戸塚ヨットスクールの問題は、若い人の問題であるよりは、大人の問題であり、ギリギリの極限において、教育の意味を再考させずにはおかない。周知のように、戸塚ヨットスクールの是非については、いま論議が激しく分かれているが、論壇誌は総じてマスコミの戸塚批判には与していない。

逮捕される直前に『文芸春秋』でスパルタ教育の石原慎太郎との対談「教育は『愛』か『体罰』か」をおこなった戸塚宏は、「僕は戸塚さんは、現代日本の、実に多くの人間にとって、とても目障りだと思うんだな」という石原の発言に応えて、「どうもきれいごとが多過ぎてね。俺が一番きらいなのは、『愛』なんですわ」と語っていた。

『最後の選択』を語る情緒障害児父兄

この問題については、上之郷利昭・若林繁太の対談「戸塚ヨットスクールの何が問題か」（中央公論）、『朝日ジャーナル』（七月二十二日号）の特集「『病める子』をだれが救うか」などがあるなかで最初に問題を提起した、映画『スパルタの海』の原作者・上之郷が戸塚ヨットスクールにわが子を投じた情緒障害児の父兄と「殺すか殺されるか、これが最後の選択だった」と題する緊急座談会を『現代』でおこなっている。「親が悪い」と自らは安全圏にいて通りいっぺんの批判をすることの無意味を知らせてくれて、思わず目頭が熱くなった。

親と子の問題を考えさせるという意味では、今月、羽仁進「父・羽仁五郎との個人的な関

「『圧勝』逸した中曽根自民党」（エコノミスト・七月十二日号）、白鳥令「野党を『分割統治』して自民の圧勝」（週刊東洋経済・七月十六日号）、岩見隆夫「政党政治の迷路」（中央公論）は、いずれも気鋭の政治学者や政治記者の分析として読ませるものであった。とくに私にとって印象深かったのは、ナルシストとアジテーターというスタイルを鋭く抉った飯坂良明「中曽根首相のナルシスト修辞学」（中央公論）である。

『対ソ関係は〝巧遅〟で』と説く神谷氏

外交にかんしては、神谷不二「中曽根外交　もう一つの素顔」（Voice）が中曽根外交にかなり高い評価を与えている。

神谷は「日本が対ソ関係を考える際には、〝拙速〟よりも〝巧遅〟を旨とする必要がある」というけれども、それは日中関係についてもいえることであろう。中ソ接近という今日の潮流のなかで、ソ連も中国もこの六月、新しい政治体制を発足させたが、この問題については、梅津和郎「アンドロポフの第二ラウンド」（経済往来）、中沢孝之「ソ連指導部の〝派閥力学〟」（世界週報・七月五日号）、志村矩夫「中国全人代と指導部人事の意味」（同・七月十二日号）、森永和彦「中ソ新体制の発足」（自由）がそれぞれに手堅く分析している。岡田英弘と木村浩の対談「中ソ特権階級の栄耀栄華」（諸君！）は、「赤い貴族」の権力の内幕を暴こうとするものであり、菊地昌典・中嶋嶺雄「討論　苦悶する中ソ社会主義の行方」（朝日ジャーナル・七月二十二日号）は、二人のあいだの一連の論争シリーズの一つである。

なお、今月は、『週刊東洋経済』（七月九日号）の特集「ケインズ生誕一〇〇年」の金森久雄「ケインズ型経済政策の必要性」ほか、経済政策にかんする論議がきわめて活発であった。経済学への信頼の回復は、こうした政策論争を経てこそ達成されねばなるまい。

（東外大教授・国際関係論）

文化

吉田　俊雄・画

姫」を並陳し、その周辺の作品群を集めた構成。この二点は古径の全画業の展開のなかで二つの頂点を象徴的に示す名作だから、そこに古径芸術の本質の要約をみることもできよう。通説的にいえば、古径の画業の展開

「髪」「孔雀」などの新古典主義といわれる時代、最後は戦中戦後の円熟境とされている。

さて二作品だが、「竹取物語」は浪漫的詩情を優美と荘厳の浄光世界の王朝風絵巻とし、次に厳しい古典精神と写実主義

的な思考や情念

日本画の素材と

にくく、従って日

的で、自滅的運

考えがあること

それならば「

川〟の部分（別

頂きたい。安珍

疾走し日高川岸に

蛇に変身する清

と凄艶（せいえ

澄明に昇華され、

こ）たる日本画の

的に伝える画境

日本画、洋画でも

か。また全世界の

れな例ではない

は日本画の表現

洋画風現代日本

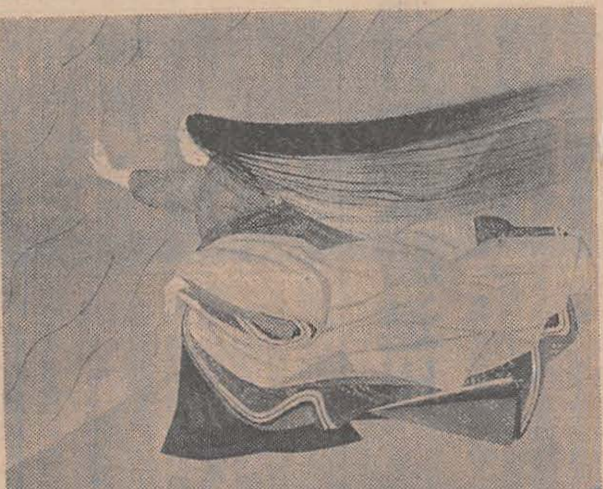
鐘としたい。この

び、いつも思い

「もの思へば

よりあくがれ

ぞみる」



小林古径「清姫・日高川」部分

▽小林古径展

／12山種美術館、

黒板

アジア経済研究所「発展途上国研究奨励賞」　鈴木佑司氏（法大法学部教授）「東南アジアの危機の構造」（勁草書房）

5日から8日ま

潟町（民宿）で

詩になるか」、

ロディーと笑い

「民俗と話」、

刊）、土屋健治

ジア研究センタ

ンドネシア民族

文社刊）。賞金

日曜クラブ懇

2時、東京ファ

（国電有楽町駅

氏「新しいセク

性学会からの報

百円。連絡先・

9409。

勿来海岸海の